

空也上人の研究

——特に豊後豊前を中心にして——

中 野 昭 純

「神の日向に仏の豊後」という言葉がある。

大分、福岡県には実に多くの仏教遺跡が残っている。と同時に民間信仰の行事も多い。郷里国東半島もその類にもれず、信仰価値は高く評価される。しかし多いといつても全ての仏教信仰を列挙する事は数の上からでも不可能である。よつて私は「空也聖」とその信仰について調べてみよう。

平安時代の修行僧空也の豊後豊前に於いての資料が残念ながらほとんどなく、又諸書にも空也が豊前豊後に來処した記事は載っていない。しかし現に空也の伝記が多く当地方に残っているから興味がある。文献がない故に研究の唯一の方法は現地調査であつた。「太宰府管内志」と「地方の国史」を資料とし、地図帳を片手に九州北部を歩いた。研究した道順を示すと、国東半島から周防灘

沿岸を北上し行橋市から北九州市へ、芦屋を通つて直方市植木町に出た。山を越えて日田に出た後再び国東半島に帰着した。この間十日余り、写真に記録に長い旅だつた。

「ひじり」の性格を念仏行に盛つて、山上の隠遁行から、山下俗里の信仰に移したのは実に空也上人だつた。彼は歴史的な遊行形態と口称念仏、更に呪術的舞踊念仏を新たな宗教経験として再現し、多くの善男善女の宗教意識を揺つたと伝えられる。源為憲の空也誄、慶滋保胤の日本往生極楽記によると、彼の出生滅亡はほとんど定説がないらしい。

「上人不顯父母、無説郷土、有識者或云、其先出自皇派焉。」や

「不言父母、亡命在世、或云、出自横流。」

と記されるが出世はわからない。

「少壮之日、以優八塞、曆五畿七道云云。」

「少好扶遊、天下殆遍、所過道途、多為利濟、荷鋤錢嶮拾石鋪濕、架破橋修發寺。」

を見ると空也の性格が知られる。

「口常唱弥陀仏、故号阿弥陀聖。」

は空也が阿弥陀聖、市聖と呼ばれていた事を知ることが出来る。又彼は極樂往生を、

「ひとたびも 南無阿弥陀仏と言う人の

はちすの上にのばらぬはなし。」

と述べられている。

彼の入滅は、七十才前後で洛東西光寺らしい記録がある。

さて、彼の豊後豊前に於ける勸化は「豊後国史速見郡中」に

「本郡の仏教は奈良朝時代に於いては、混沌たる仁聞の修驗的仏教行われしが、平安朝に至り弘仁の頃より六郷満山の改宗と共に、多く天台宗行われ、更に天曆の頃に至り、空也上人此地派錫によりて、また真言称々行わるるに至れり。（中略）

天曆中本郡に來りて数寺を建立し、且つ荒廢せる寺院を興せり、故と空也は天台に出づれば空也の巡錫は蓋し、其の結果に於いて天台宗の弘布となれり。」

と記されるに、空也によつて本掛的な日本仏教が本郡に

もたらされた。そして彼が豊後豊前地方に於いて建立したとされる寺院を述べよう。

豊後は興導寺、朝日寺、小武寺、利益寺、見上寺、密伝寺、願成就寺

豊前は善光寺、西福寺、九品寺、等寺院もかなりの数に上る。外に石碑石塔が、興導寺境内、見上寺々前の田中、利益寺奥の院、善光寺の墓、植木寺中の聖人堂があり、空世の伝説は聖人坂や聖人が浜、道念仏、茶筌、寒念仏、三申踊り、鉢たたき念仏、九品念仏、大日念仏、芦屋念仏の説が各地に残っている。

このように九州地方北部には文献上明らかではないが多くの空也行蹟があるので重要視されなければならない。空也上人の勸化念仏は、ある地方ではおどりの念仏となり、又あるいは遊歩念仏などに変つていったかもしれないが、その念仏布教の強大強力だった事は、あらためて見直す必要があるのではなからうか。